



大阪商業大学
FD ニュースレター

第14号

2014年10月発行

目 次

1	平成 26 年度公開授業および意見交換会 開催概要-----	3
2	公開授業を終えて-----	4
	経済学部 経済学科 教授 佐野茂	
	総合経営学部 公共経営学科 教授 枡永佳甫	
	総合経営学部 経営学科 教授 和田伸介	
	総合経営学部 商学科 教授 津村修志	
	総合経営学部 経営学科 准教授 崔圭皓	
	経済学部 経済学科 講師 坂口正彦	
	総合経営学部 経営学科 教授 樽磨和幸	
	経済学部 経済学科 講師 中塚華奈	
3	公開授業 意見交換会報告-----	12

1 平成 26 年度公開授業および意見交換会 開催概要

平成 26 年度本学 FD 活動の一つとして、公開授業が下記の日程で開催された。

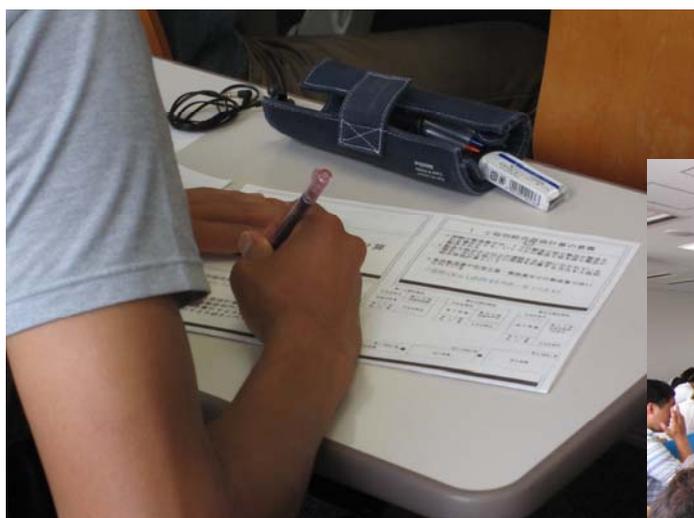
授業科目・担当教員・教室については以下のとおりである。対象となる授業については、今年度新任の教員が担当する授業の他、授業内容や受講者数等を考慮して選出した。

<公開授業実施日程・科目>

月 日	時限	科 目 名	担当教員名	教室
6 月 30 日 (月)	2 限	教育相談・進路指導論	佐野茂	434
	3 限	NPO 論	栢永佳甫	4510
7 月 2 日 (水)	2 限	工業簿記論	和田伸介	424
	3 限	BP 英語 I	津村修志	622
	4 限	レジャービジネス経営論	崔圭皓	631
7 月 3 日 (木)	2 限	一般経済史 I	坂口正彦	423
	3 限	ビジネス・プログラミング I	樽磨和幸	情報 1
	5 限	農業経済学	中塚華奈	424

なお、各授業において FD 委員会より受講学生にアンケート（授業の進め方についてどのように思ったか、この授業について改善したら良いと思うことはあるか）を実施した。

また、意見交換会を 7 月 16 日（水）14：40～16：00（於：本館 4 階会議室Ⅱ）に行った。



2 公開授業を終えて

経済学部 経済学科 教授 佐野茂



このたび FD 委員会から初めてお声がかかり、6月30日(月) 2限目の、教職科目である「教育相談・進路指導論」を公開授業として実施することになった。教職科目の担当教官でもあるので、平素は学生の教育実習先等で研究授業を指導することが多いが、今回、その逆の立場になり評価とは無関係だが、久方ぶりにいい緊張感をもたせていただいた。

担当した「教育相談・進路指導論」は教職履修者約30名、2年生が中心で、教職希望者(もちろん半数は資格がらみで履修しているものも在籍する)の履修科目でもあり、その意味で学生の授業へのモチベーションは高いものと認識している。

そのような枠組みでの授業なので、私語等のストレスはなく本来の授業に集中できるものなのだが、今年度は私語こそないが、公開授業でさえ、時々居眠りしている学生が少数であるが見受けられた。その場であえて注意はしなかったが、翌週には厳しく注意したことも付記しておく。

この授業のねらいは、学校現場においてカウンセリングマインドを用いて、生徒の教育相談を実施するという想定のもと、教師と生徒役というロールプレイの中で、「傾聴」のスキルを高めていくというものである。今年度の改善点は、できる限り学生が実践しているロールプレイをビデオカメラで撮り、その映像をふりかえりながら「傾聴」のスキルを高めようという試みを実施した。「傾聴」のスキルはコミュニケーションスキルの軸となるものであるが、その良し悪しは非言語レベルの、例えば顔の表情といった全体的なジェスチャーで可視化できる。昨年度までは、ロールプレイの相手役からの感想等で評価していたが、今年度はそれをモニタリングすることにより学生全体で評価できるように授業改善をこころみた。

公開授業をさせていただきあらためて感じたことは、学生も公開授業に慣れているのか、周囲の目があるにもかかわらず緊張感がうすかったこと。これは周囲の目を気にかけない学生自身の問題もあるが、やはり教授者側(私)がもっと学生が緊張感をもって、しかも楽しく授業内容に食いつくような教材提示をしていかなければならないことを痛感した。今後の授業実践において「いい意味での緊張感」を念頭に教材を精査していきたい。



最後にご多忙の中、公開授業に参加、またご助言をいただきました教職員の皆様にご心よりお礼申し上げます。

総合経営学部 公共経営学科 教授 柏永佳甫

公開授業の最後に学生にアンケート調査を実施することになっている。各教員が担当する1科目の講義科目に対して実施する授業アンケートの回答形式とは異なり、自由記述式によるものであるため、学生の歯に衣着せぬコメントが教員のもとに届く。このアンケートより、いろいろな情報を得ることができる。ここで



はNPO論に関するアンケート内容のうち、特に多かったもの2点についてレポートしたい。

まず、比較的多かった「講義室が狭すぎる」というコメントについてである。講義室は、特に教員からの要望が無い限り、前年度からの実績を勘案し、予想登録者数に応じて暫定的に配分される。履修登録期間が終わると登録者数が確定するが、一般的に実出席者数は登録者数の7割から8割程度である。教員は実出席人数に応じた新たな講義室を希望することも可能であるが、問題は実出席者人数に対してどの程度の大きさの講義室が適正なサイズなのかということである。今

回公開授業の対象となったNPO論の場合、過去4年の間を振り返ると、学期を通じて私語の多いクラスになったり、比較的静寂なクラスになったりしている。何が要因でそうなるのかはわからない。例年、第3回目の講義ぐらいから学期末まで、どちらかのタイプに定常化しているので、年毎の小職の講義スタイルの多少の変化が、このことに大きく影響している訳ではないようである。そこで、私語の少ない静粛な環境を担保すべく、適正な教室サイズを模索する試みをここ数年続けている。今年は教室のサイズを実出席者数が、定員の7~8割を占める講義室を試してみた。私語をしている者の特定が簡単であるため、適宜注意することにより静粛な講義室を確保することを目論んでのことである。公開授業のあとのアンケート調査には、改善点として、「教室が狭すぎるのもっと広い教室が望ましい」というコメントが多く寄せられた。このことは予想の範囲内であったが、「もっと私語をしている学生を注意してほしい」という要望も散見された。小職としては、講義の進捗状況に影響を与えないギリギリの頻度で私語を注意していたつもりなのだが、あまり窮屈だと隣の席の者との私語を助長してしまうのだろうか。次年度は、実出席者数の1.8倍程度の収容人数の講義室を希望し、静寂を保つことのできる適切な教室サイズを探してみたい。

次に、「もっと板書を体系的にわかりやすくなるように工夫してほしい」という趣旨のコメントが多く寄せられた。話を聞いてみると高校の授業の時の板書のようなものを学生は思い描いているようである。これに対しては、公開授業の次の講義の時に、あえてそうしていない理由を受講生に伝えた。受験対策を主眼とした高校の授業とは異なり、大学の講義は思考力を養うことを主眼としたものである。高校の時のように、ただ板書されたものをきれいに写すような作業をしては、自分で考える力は身につかない。教員が授業中に話した内容について、自分の頭で考えて、自分の言葉で表現し直し、それをノートに書き留めてこそ、自分が本当に理解しているかどうか確認できる。学生は黙って聞いていたが、本当にそうだなと思って聞いていることを願うばかりである。



総合経営学部 経営学科 教授 和田伸介

工業簿記論では、2年生から4年生までの学生（78名）が受講している。工業簿記論の目的は、複式簿記の原理を基礎としながら、製造業における原価計算の仕組みと原価の計算方法を理解することにある。授業では、各回において取りあげるテーマの解説および原価計算の問題演習の2つに授業時間を区分し、取引の仕訳、勘定連絡図、勘定間の振替、完成品原価の計算、単位原価の計算、経営管理に役立つ原価計算技法等に関して説明を繰り返しながら重要な専門用語の理解と計算技法の習得を目指している。その際には、基本

から応用へと、また同時に、簡単な計算から複雑な計算へと段階的に難易度を高めるように留意し、授業を展開するように配慮している。とりわけ、授業時間内において練習問題を解く時間を設定し、学生自ら繰り返し練習問題にとりくむように指導している。

工業簿記を含め会計分野では、企業の経営活動と企業会計との関係、会計学における様々なテーマを学ぶことと並行して、計算問題を反復練習し、知識を一つ一つ積み上げていくことがよい勉強法であると言われている。工業簿記論の受講にあたっては、大学1年で履修する簿記原理を理解していることを前提にして授業を進めている。留意すべき点は、学生の工業簿記に関連する知識や関心が様々であるために、受講者の理解度には少なからず違いがみられることである。そのため、学習するプロセスを動的にとらえ、このプロセスに焦点をあて、細かく状況を把握することも必要になる。



とりわけ、2年生、3年生と4年生の受講者間においては、当然のことながら、各人、履修する科目が異なるために、習得した知識にある一定の差が見出される。このことに密接に関連して、本講義における受講者には大きく分けて商業高校出身の学生と普通科出身の学生がいる。前者の商業高校出身の学生は、すでに簿記・会計学を学習しているので、工業簿記論に関してある程度の知識を有している。対照的に、後者の普通科出身の学生は大学入学後、初めて簿記・会計学を学習することになる。従って、学生一人一人に対し、学生がどこまで理解できて、どこがよく理解できていないのかという点を明確に把握し、きめ細やかに対応することが重要である。

公開授業当日（7月2日）に実施された授業に関するアンケートの結果によれば、学生が様々な意見を述べている。これらの意見を手掛かりに、授業のあり方、授業の構成、授業の進め方の改善策について引き続き検討することにした。特に、科目に関する興味を喚起し、学生が授業に参加する意欲を引き出すように、授業方法を開発していくことが求められている。受講後によくわかったという実感や、ある事柄について理解を深めたという自信を学生自身が獲得できるように授業を拡充し、あわせて学生が積極的に学習を進めるために、学習成果の到達度に関する客観的な評価基準を策定することが不可欠である。



総合経営学部 商学科 教授 津村修志

語学の授業の良し悪しを決めるのは、当然ながら効果があったかどうか、ということになるでしょう。しかし、何を持って「効果があった」とするかは、意見の分かれるところです。私は、語学を学ぶなら言葉を使えるようになって欲しいと思います。言葉を使うことで、自己開示し、様々な人と交流し視野を広げ、協力して何かを達成する、というようなことが学習者の人生に大きな満足感、幸福をもたらしてくれると信じているからです。言い換えれば、コミュニケーションの道具としての英語を身に付けることに意味があると思っています。したがって、試験のための詰め込み学習や知識の蓄積では、もったいないと思うわけです。ですから、どんなに面白い、役に立ちそうな話をしても、それ自体は知識の蓄積にしかならず、たとえ学生の満足度が高くても、良い英語の授業とは思えないのです。



私は、学生が教室の中でどの程度英語を口にするかが授業の良し悪しを見る物差しの一つに成り得ると思います。つまり、学生同士が英語で話し、その中で語法や文法的規則を帰納的に身に付けてもらえれば理想的ですし、私の目標でもあります。実際の私の授業は、目標とは程遠いのですが・・・。

上記を前提として、少しでも英語で応答が出来るようになることが「効果」とするならば、授業においてその効果が実証されてきたのが音読（シャドーイングを含む）と協調学習です。声を出す、実際にコミュニケーションを行うことにより、量をこなせば、大きな効果が期待できるはずですが、

そう信じて私も授業に取り入れてきましたが、現在大きな壁にぶつかっています。最大の壁は、英語嫌いの学生が3分の2を超えていることです。宿題どころか、試験勉強もしない学生が多い上に、対人関係に問題を抱えている学生も少なくありません。その結果、他人と話すことや、声を出すことに抵抗を感じる学生が増えています。したがって、本来効果が期待できる活動を行わせようにも、私の指導技術不足も手伝って、声を出しているのは数人だけということもありました。

こういう状況のまま必修として英語を履修させることに、私は疑問を感じています。やる気のない学生に無理に授業を受けさせても益々英語が嫌になるでしょう。そもそも英語が嫌いだと言う学生が大半ですから、音読や協調学習がうまく行かないのも当然でしょう。諺に、“You can lead a horse to water, but you can't make it drink.”とあるように、無理強いすることには全くメリットがなく、学習者の自立・自律を遅らせるだけだと思えるのです。また、習熟度が極端に低い学生も手に余っています。なぜアルファベットも覚えていない学生に英語を履修させなければならないのでしょうか。習熟度が低い上に、最低限のことも学習してこようとしない学生に引きずられるため、定期試験で学生に点を取らせるための授業になってしまっていると自分でも思います。

一方、やる気のある学生は少ないですが、0ではありません。しかし、授業の中でそういう学生に目を向けることは非常に困難です。一体誰のための授業なのでしょう。

これまで授業の中で様々なことを行ってきましたが、やる気のない学生を動機付けるのは本当に難しいと感じています。もはや教室内で学生を動機付けることは、一担当者には荷が重いと考えます。そもそも英語のカリキュラムには、動機をその上に積み上げていけるだけの十分な土台がないようにも思います。口頭試験の可否、具体的な到達目標、目標に対する測定手段など未解決の問題が多い上に、学生の中に「必死でやらなくても卒業できる」と考える風潮があるとすると、授業は“Only a drop in the bucket.”と覚えてなりません。



授業の中身を議論することも大切ですが、中学校1年生で習うことも身に付けずに卒業出来てしまう現状を、大きな問題と捉える必要があると私は思います。英語はやる気のある学生にしか履修させない、口頭でのレベル分け・到達度テストを導入する、英語Ⅰの単位を取るまではⅡを履修させない、などの少々手荒な動機付けと、英語しか通じない場所を設ける、英語が話せるようになった学生を学園祭などの場で「見せる」、などの内発的な動機を誘発させる仕掛けの両方があれば授業は生かされるでしょう。指導技術の不足を棚に上げて申し上げるのは心苦しいのですが、授業の枠を超えた動機付けも行いながら、英語を学びたいという学生のみが履修する環境に変えない限り、授業の効果は望めないと考えます。

「be 動詞って知ってる？・・・知らないの？・・・どこの大学出たの？・・・○大かあ。じゃ、しょうがないよね。」というやり取りがあるようでは、明るい将来を想像することはできません。

FD 委員会の主管のもと、7月2日、「レジャービジネス経営論」の公開授業を行った。本科目は前期2単位の公共経営学科の主専攻科目であり、対象受講者は2年生以上である。当日は12回目の授業であり、全体履修者106名のうち84名が出席していた。

出席管理については、毎回授業の終わる頃に一回のみ確認をしており、単位認定条件として3分の2以上の出席を命じている。学年ごとの受講者分布は2年生が30名ほど、3年生が60名、4年生以上が15名程度である。学期中、14回の出席を取り、そのなかでもっとも参加人数が多かったのは2回目授業の93名であったものの、その後の出席者数は80後半台に落ち着いていた。



本科目の主範囲はレジャー活動のなか、観光・ツーリズム関連分野（宿泊、グルメ、テーマパーク他）と公演・興行ビジネスに焦点を合わせている。言い換えれば自ら体験するレジャー・エンタテインメント分野にテーマを絞っている。同じレジャー活動のなかでもいわゆるメディア依存度が高いコンテンツ・ビジネス（新聞、出版、音楽、映画、放送、ゲームなど）は後期科目である「アミューズメントビジネス経営論」で講義を進めている。

とはいっても、講義のなかでもっとも肝心のポイントは、レジャーの概念を包括する広い意味でのエンタテインメントを如何にビジネスとしてマネジメント（管理）し、展開（維持および成長）していくのかである。

今回の講義では、東京ディズニーランドを運営している㈱オリエンタルランドの事例を参考に、テーマパーク・ビジネスについて考察した。なかでもリピーターを飽きさせない工夫とは何か、またリスクに備える万全なマネジメントとはどうあるべきかについて考える時間であった。

今回、授業後アンケートから分かったこと

学生アンケートに目を通して見た。そこで、学生諸君がおおむね授業について分かりやすいと評価していて、ホットした。おそらく授業中、彼らの目線に合わせたテーマを増やしたことで受講者の関心を引くことができる程度できたのではないかと思っている。

一方、授業については、肯定的・好意的なコメントが予想以上に、多かったので、ちょっと戸惑っている。



ほか、学生からの改善の要求項目として、私語でうるさい一部学生にもっと注意してほしいなど指摘があったので、今後の授業では念頭においておきたい。また、教室のプロジェクター用スクリーンが汚れて見づらいなど幾つかの指摘があったので、この点については引き続き教務課と相談し、改善していただきたい。私見ではあるが、現在の631教室はマルチメディアを活かした授業には向いていない（ノートOSはXPと古く、音響も悪く、スクリーンも汚いなど）ため、後期以後にはみっちり整備してほしい。

2014年7月3日木曜2限、公開授業にのぞんだ。以下では、授業について説明した後、公開授業を踏まえて考えたことを記していく。



公開授業の対象となった科目は一般経済史Ⅰであり、これは経済史の入門講義である。経済学部1年生の必修科目であり、木曜2限（EA～ECクラス、履修者125名）、金曜1限（ED～EGクラス、168名）、月曜2限（EH～EJクラス、122名）に分けて授業している。

公開授業では、昭和戦時期における日本の統制経済について講義した。具体的には、映画「火垂るの墓」を通して、戦時統制経済、なかでも徴用制度、食糧供出制度について学ぶというものである。導入で「火垂るの墓」のイントロをみせ、あらすじを説明し、本論で板書形式の講義を行い、最後に講義内容と重なる部分についてのみ、説明つきで映画を鑑賞するという構成である。

御出席いただいた3名の先生方からは、おおむね良い評価をいただいた。また、公開授業時、約100名の学生から集めたアンケートでは、現状どおり進めて欲しいという意見が最も多かった。その一方、アンケートにある「改善点」の欄には、動画を切らずに見たかったという意見が複数あった。これは我慢していただくほかない。また、厳しいコメントを拾いあげると、私語に関するもの（もっと注意せよ2名、これ以上注意しないでほしい2名）、「火垂るの墓」によって「午前中から悲しい気持ちになった」1名という結果となった。

今年4月に本学に着任し、私語については5月中旬頃より、ある先生の御感想を引用すれば、「大教室の必修科目としては合格点を与えられる程度に静かである」という状況に変えることができた。学生の名前を覚えながら前期試験を採点したため、後期には、名前を呼んで注意するという最も効果的な方法を用いることができるだろう。

授業に際しては、経済史の入門講義として教えなければならない項目をこなしつつも、(過剰ともいえるほど)学生の希望を実現することを心がけている。第2～5回目の講義で「授業の問題点も書くように」と言い添え、アンケートを書かせたことによって、学生の希望を知ることができた。それは、一言でいえば、興味を持たせてほしいというものであった。これを受けて、おおげさな表現であるが、学術エンターテインメント系のテレビ番組を作るように、授業を考案していくことを心がけるようになった。万人が興味を抱くような教材を用意し、授業の局面を3、ないし4つに分けて、学生が飽きないよう(視聴者がチャンネルを変えないよう)工夫し、できるかぎり、豊かな表現力で講義する。こうした点を目標としながらも、最終的には、授業のなかで、どのように学問の深さと重さを織り込んでいくのかを課題としており、今後とも努力を続けていきたい。

[謝辞]公開授業という機会をいただいたことにより、自らの現状と課題を知ることができました。FD委員会委員長の西嶋淳先生、同副委員長の孫飛舟先生、有益なコメントをいただいた林妙音先生、柴田孝先生、中野浩司先生はじめ教職員の皆様に御礼申し上げます。





今回の公開授業で私が担当した科目は、「ビジネス・プログラミング」（経営学科主専攻基幹科目、通年、2年次配当、木曜3限開講、履修登録者50名）である。この科目は、オフィスソフトを使って行う業務をプログラミングによって効率化できること、ならびに、その方法を学ぶことを目的として、情報処理実習室で実施している。オフィスソフトとしてMicrosoft Excelを、プログラミング言語としてVBA (Visual Basic for Applications) を取り上げている。

公開授業の回（通年科目の12回目）は、プログラミングの基礎を習得するフェーズの中盤で、前回までに学習した内容の理解を深めるための課題学習に充てている回であった。授業時間の前半で前回の内容を復習し、後半は、教員が作成したオリジナル課題について説明したあと、各自で課題に取り組むといった流れで進めた。受講生同士で相談して課題を完成させてもよしとし、余裕のある受講生には追加課題を与えた。

年間30回の授業の大半は、テキストの例題を使うかオリジナル課題を使うかの差はあるが、おおむねこのような流れで進めている。プログラミングの学習にはこのような方法が効果的であると考えている。昨今、アクティブラーニングが注目されているが、実習を含む情報処理系の授業は、従来から（一般的）アクティブラーニングを実践してきたといえる。

授業時間の半分強を受講生のペースでの実習に充て、受講生からの質問に答えるという形態で実施しているが、質問内容によっては時間をかけた応対が必要なものもあり、授業時間内にすべての質問に対応しきれないこともある。今回FD委員会に採っていただいた授業アンケートでもこの点を指摘している回答が複数あった。このような場合、不本意ながらも受講生の「気づき」を待つための時間を削ることになってしまう。また、前回学んだ知識とスキルが次回の授業で必要になるので、欠席回の授業内容を事前にフォローしていない者への個別対応が必要となることも多い。こういった点から、この授業では、授業を補佐するTA (Teaching Assistant) の役割が重要であると感じている。

授業支援用の複数のツールをバインドしたLMS (Learning Management System) が開発・提供されたのを機に、研究室にある個人サーバにこれを導入し、2005年度以降は、担当するすべての授業で、受講生への連絡／教材の配布／小テストやアンケートの実施／レポートの受け取り／掲示板等のコミュニケーション機能を選択的に利用している。このような授業支援環境が全学的に導入・整備され、希望する教員が、希望する授業で、希望するときに、希望する機能を利用できるようになれば、学生の学修支援ならびに教員の授業運営支援として有効ではないかと考えている。



最後になりましたが、今回公開授業の機会を与えていただいたFD委員会に、また、貴重な時間を私の授業の参観に割いてくださった教職員の方々に、そして、アンケートにて意見を寄せていただいた受講生のみなさんに感謝いたします。

これまでに他大学で講義をしてまいりましたが、講義最終日に学生に授業アンケートをとり、後日、その結果が送付され、それに対して自分の意見を事務局にフィードバックするという学校ばかりでした。

大商大での公開授業は、錚々たる先生がたが真剣な眼差しで後ろの座席にずらっと座っておられる空間で講義を行うことに、まずはなによりも緊張しました。また、学生にとっての授業アンケートを自分で回収し内容をチェックしたあと、自分で教務課に提出するというシステムも初めてのことでした。ドキドキしながらアンケートを拝読した結果、ほとんどの学生は、私に気をつかってくれているのでしょうか、「今のような授業の形態でいいと思う。」とか「パワポやビデオを使っていてわかりやすい」と書いてくれています。講義のための授業準備には思った以上に時間がかかります。時世の流れに伴って新情報を付け加えたり、伝えかたを変えてみたりと、毎週、授業準備は自転車操業状態なので、肯定的なアンケート回答にほっと救われる想いでした。



その一方で、3名の学生の書き込みにしばらくの間、心が折れました。「話が長い」、「一方的に話をするので疲れる」、「板書が少なく何が大事なことがわからない」という否定的意見を書き込んだ学生に嫌悪感を抱き、講義をすることへのモチベーションもさがりました。悶もんとした1週間を過ごしました。友達に愚痴りました。お酒を飲みにいきました。同じような授業アンケートの結果に悩む同業者の大学の先生のブログをよみあさりました。

その結果、翌週、私は不死鳥のごとく、よみがえることにしました。否定的意見を尊重してみようと思えました。これまでの自分の講義のスタンスは「大学の講義はこんな感じ」という自己満足以外のなにものでもなかったと思えたのです。翌週の講義は、極力、対話形式にして全員を当てました。「わかりません」という答えのオンパレードだと思っていました。しかし、予想に反して多くの学生が自分の意見を言ってくれました。今まで以上に丁寧に板書するようにしました。みんな必死で書き写していました。講義の最後10分は小論文形式で感想や意見を書いてもらう時間にあてました。意外といろいろな考えを書いてくれました。わたしの講義はFD委員会の公開授業に「さらされた」おかげで、変わったと思います。講義をする自分も楽しくなりました。本当によかったと思えます。有難うございました。



3 公開授業 意見交換会報告



2014年7月16日（水）に第3回FD委員会・公開授業意見交換会が開催された。参加者は公開授業担当教員、FD委員、公開授業参観教員の計14名であった。

まず担当教員が授業の進め方やアンケート結果を振り返り、以下のような感想を述べた。

- ・公開授業での他の先生による参観は、学生にとっても刺激になるのではないかと期待したが、教室の後方に先生が来ても緊張感が見られなかったのが残念だった。
- ・「マナーの悪い学生にはもっと注意してほしい」という意見や、授業中に実施するクイズに対しての「難易度が高い」という意見については改善点と捉え、公開授業の翌週より改善を試みている。
- ・前期中の前半の講義において、講義方法についてのアンケートを実施し改善を試みていたため、現状のままでもよいとの意見が多かった。
- ・学ぶべきポイントを絞り、学生の興味関心を引く話題から講義に入るようにしている。
- ・実習を中心とした学習に多くの時間を充てており、学生からの質問に答える形式で進行しているが、すべての質問に対応しきれないこともある。欠席者への個別対応が必要なことも多い。
- ・アンケートにおいて「話が一方的」との感想があり、次回より学生に質問し答えてもらうような参加型の講義を試みた。人数の多い講義だが、受講学生からの反応は良く、今回の公開授業は良い機会となった。
- ・学生から「私語でうるさい学生を注意してほしい」とのコメントがあったため、今後は念頭において講義をしたい。

続いて、講義の進め方に関する疑問等について意見交換が行われ、以下のような意見が出た。

- ・少人数の講義（演習など）においても出席しない学生がおり、対応に苦慮している。講義に集中できていない学生も多い。公開授業を参観していても、他の先生方も学生の興味を引くために様々な工夫をされているようだった。
- ・講義の中で学生に考えさせたり発表させたりするために、まずは思考や表現の土台となる基礎知識をつけさせることが必要である。

- ・大人数の講義において、集中できない学生を注意することに時間を割きたくない。真剣に講義を受けようとしている学生に対しても損をさせることになってしまう。
- ・必修科目では、シラバス作成の時点で内容を絞り込んで、ワークや復習のための時間を確保し、講義に出席すれば学生の身につくよう工夫している。
- ・少人数の講義では、課題としてプレゼンの準備をさせてもしてこない場合がほとんどなので、講義中に準備をする時間を設け、準備ができれば次回から発表させるようにしている。
- ・ゼミにおいて、2～3年前にゼミ生にさせていたことができないと感ずることは多い。発表をさせようとしてもまとめ方が分からないという学生が少なくないので、レポート作成の方法から指導している。
- ・学生は S-Navi!を見ていないのではないかと。休講連絡をしていたのに、知らずに多くの学生が教室に来ていたということがあった。
- ・講義中に周知した課題を S-Navi!の授業連絡機能でも再配付しているが、確認方法については、学生には概ね理解されているように感ずる。
- ・意欲のある学生は少なくなっており、特に意欲があるわけではない学生に対応できるよう工夫すべきなのかもしれない。基礎的な知識の不足については、学生同士で刺激し合うような環境を作ると効果があるのではないかと。



意見交換の後、公開授業検討ワーキングリーダー・孫飛舟教授より「学生の学習意欲低下に対してどのようにフォローしていくのか、どこまで要求に応じていくのかを考えなければならない。また、興味を持ってもらえるような講義とするために新たな取り組みを考える必要がある。次年度も、公開授業において他の先生方の取り組みを参考とさせていただきたい」とのコメントがなされた。

今回の意見交換会では、どのように学生を講義に集中させるかについて活発に意見交換が行われた。公開授業を担当された教員にとっても、参観された教員にとっても、講義の進め方を見直す良い機会となったのではないだろうか。今回出た意見を、今後の講義へと活かしていただければ幸いである。





大阪商業大学 FDニュースレター 第14号

発行日：2014年10月15日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-8438